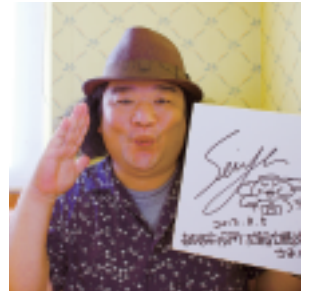


ときめき インタビュー



…プロフィール…

1967年東京生まれ。越谷市在住。成蹊大学法学部卒、鉄道写真家の故真島満秀氏に師事。独立後、2000年に山崎友也氏と有限会社レイルマンフォトオフィスを設立。現在に至る。鉄道写真に何気ない日常を組み合わせた「ゆる鉄」シリーズを発表。日本写真家協会、日本鉄道写真作家協会会員。甘党。ブログ「1日1鉄!」
<http://railman.cocolog-nifty.com/>

いつもの公園

中井精也さんは、鉄道写真を専門としているプロカメラマン。インターネットで「1日1鉄」というブログを公開し、毎日1枚鉄道写真を掲載しています。その中にとどき、すぐ脇を武蔵野線が通る「いつもの公園」が登場します。「最初は、撮影の時間が取れないときに仕方なくでしたが、そのうち面白がってくれる人も増えてきました。同じ公園でも季節や天気、時刻の違いで、表情が変わるんです。ネタが毎日なので、見た瞬間に、例えば今日はレンゲと空とヒマワリを撮ろうと。鉄道という要素に俳句の季語のように季節感を入れて、1枚の写真にバランスよく配置するんです。あと文章を添えて、僕は照れずに書けちゃうんです」

鉄分の濃い青春時代

「子どもの頃は、虫取りが好きでした。あと、スーパーカーブーム世代だったので、消しゴムも集めました」。父親からカメラをもったときも、最初はスーパーカーを撮っていたとか。「いろいろ

撮るなかで、中央線の201形が当時すごく格好良く思えたんです。友達と電車を撮り始めたら、今度は収集欲が出てきて。中で鉄道研究部に入りました。以降、「鉄分の濃い青春」を送っています」

「中2のときにあだち充の『みゆき』という漫画を見て、彼女を作ったんです。総武線の中で他校の女子に告白して。それで、彼女に電車の写真を見せるんですが、どうも受けが悪い。でも、きれいな風景と一緒に写っていたりすると、『行ってみたい』とか言っていて喜んでくれるんです。そのときですね、『彼女にプレゼントしたときに引かれないう鉄道写真』という『ゆる鉄』のコンセプトが決まったのは(笑)」

越谷はバランスがいい

カメラマンは、子どもの頃からの夢だったといえます。「最初は給料も安かったんですけど、全然苦ではなかったです」。現在は、広告の撮影、講演、執筆、テレビ出演などで多忙な毎日、奥様はとても大きな支えだそうです。「結婚したとき、貯金9万円でしたから(笑) 頭が上がりません」



シャッターチャンスを待つ中井さん

2児の父でもある中井さん。越谷へは、平成15年に転入しました。「息子が3歳になって、カミさんの実家の近くが良いだろうということ。越谷は、都市と田舎が一緒にあるところが魅力ですね。自然と触れ合いながらも、大型ショッピングセンターなんかがあってとてもバランスがいい」

日常の大切さ

「先日、『DREAM TRAIN』という写真集のために、北海道の稚内駅から鹿児島県の枕崎駅まで、鈍行列車で出会った人の夢を聞いて写真を撮るということをやりました。この旅で、普通の人たちの人生が、いかにドラマチックでかっこよくて美しいか、ということに気付くことができました。とても大きな収穫でした」

同時に、自分の送っている日常の大切さも再認識したといえます。「長年、若手県の三陸鉄道を撮り続けているんです。東日本大震災の直後、自分がそんな弱い人間だとは思っていませんでした」



撮影 中井精也

なかい せいや
鉄道写真家 中井 精也 さん

鉄道というのは単に人を運ぶためのものじゃなくて、「日常の象徴」なんだということに気付いたんです

右の写真は、中井さんがよく訪れる市内の「いつもの公園」で撮影したものです。どこか郷愁を誘うふんわりとした写真です。中井さんがこのような写真を撮影するようになったきっかけなど、鉄道写真への思いを伺いました。

精神的に参ってしまった。そんなとき、三陸鉄道が3月16日から無料の復興支援列車を運行させたんです。それが、ものすごくうれしかった。東京にも帰宅困難者が大勢いました。電車が動き出したらすごく安心した。ああ、これで何とかなると。同じことが全国で起きた。改めて、鉄道というのは単に人を運ぶためのものじゃなくて、『日常の象徴』なんだということに気付

いたんです。僕は、自分の写真を通して、日常のすばらしさや人生の楽しさ、そして鉄道の魅力に気付いてもらえるような、そんな写真を撮り続けたいと思っています」
最後に、「いつもの公園」は秘密ですか、との質問に「大丈夫ですよ」と答えをもらいました。皆さんも、ここ出羽公園(七左町4の222)で「ゆる鉄」を楽しんでみてはいかがでしょうか。